

軍艦島アラベスク「山下英行個展」



長崎の世界遺産「軍艦島」に魅せられて、上陸取材を重ねながら3年間で約25点の絵画を描いてきた県外在住の画家が、軍艦島のある長崎で個展を開きます。端島の人々をテーマに描いた絵画です。ご高覧いただきたく御案内申し上げます。

会期 2026年 **10月5日(月)～12日(月)**

時間 10時～17時 (5日は13時から 12日は15時まで)

場所 **「楽ギャラリー」** 095-827-8960

長崎市浜町3-23浜せんビル4F

連絡先 090-2947-7505 山下携帯

入場無料



浜町アーケードの中心 中央橋から徒歩5分

ベルナール観光通り沿いビル入口からエレベーターで4Fへ

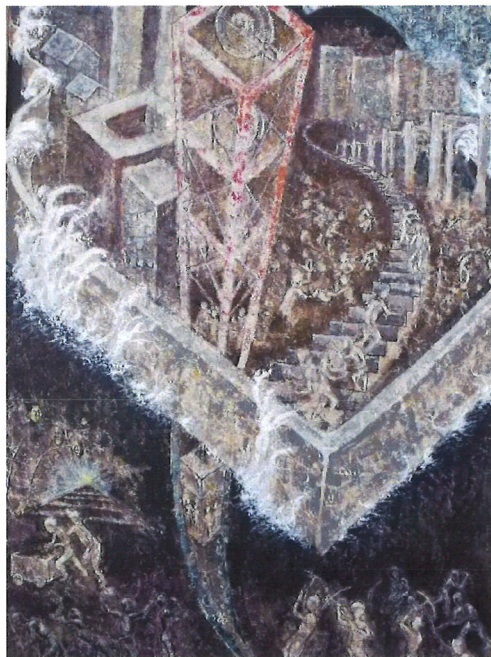
『アラバスク』それは細やかに絡み合う装飾模様を意味する言葉

～軍艦島の人々に焦点を当てかつてそこに生きた者たちの姿を描いた作品群～

東京での個展を経て、「軍艦島の絵は長崎でこそ観てもらいたい」と、静岡から約1000km離れた長崎市に作品を運び、展示したいと思います。

描かれているのは、廃墟としての軍艦島ではなく、炭鉱で栄え、人々が暮らしていた時代の姿です。かつてこの島が炭鉱で栄えた頃、狭い島に5000人近くの人々が暮らしていたそうです。一攫千金を夢見て集まった男たちやその家族、祭で太鼓をたたく人や炭鉱夫の姿から活気に満ちた当時の雰囲気伝えられたらと思います。

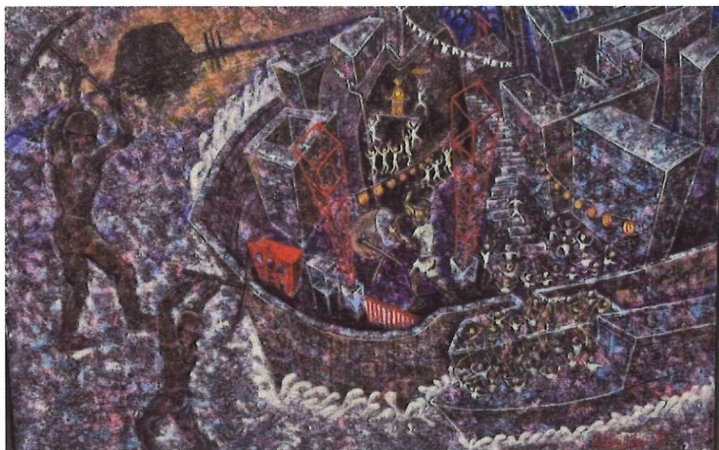
軍艦島の絵を描く画家はいますが、「そこに生きた人々」に焦点を当てた作品は珍しいと言われます。長崎の皆さん、軍艦島に行った方、行ってみたい方、是非、ご覧ください。



朽ちていく島に刻まれた人々の営みと記憶



しかし時代の流れとともに役目を終え、無人島になった今も朽ち行く建造物が人々の営みを宿している



過ぎた時の中人々の息遣い
生活の音が今も聴こえる

軍艦島で交差した無数の人生
炭坑で働く男たち
家族を支える母
無邪気に遊ぶ子供たち



QR から作者のプロフィールやこれまでの作品の写真が御覧になれます。